

ジョホール日本人学校における体育指導と実践

前在マレーシア日本国大使館付属ジョホール日本人学校 教諭
北海道札幌市立八軒中学校 教諭 高 村 克 徳

キーワード 在外教育施設、ジョホール、体育、ネットボール

赴任校の概要（2025年3月31日現在）

在マレーシア日本国大使館付属ジョホール日本人学校

THE JAPANESE SCHOOL (JOHOR)

URL : <https://www.jsj-malaysia.com/>

1 はじめに

本実践報告では、マレーシアの学校教育を参考にし、日本人学校の実態に合わせた体育授業の実践報告である。私が勤めたジョホール日本人学校は学校規模が小さいため、予算の関係上、体育の道具や施設面においてすべてのカリキュラムを満足に行うことが困難だった。そのため、体育で行う種目を変えたり、用具を工夫したりする必要があった。そこで、目を付けたのが「ネットボール」というゴール型の競技である。この競技は日本ではほとんど知られていないが、マレーシアでは女性のスポーツとして学校体育では取り入れられており、私はマレーシアのテレビで放送されているのを見て、初めてこの競技を知った。そして、現地の学校訪問の際にこの競技について現地の先生に詳しく話を聞き、日本人学校でも取り入れてみようと考えた。

2 ジョホール日本人学校の特徴

本校は、ジョホールバルの中心地から北東約25km離れたスリアラム開発地域内にあり、静かで学習に適した環境に建つ。20,238㎡の敷地内に校舎、体育館、プール、運動場等の施設・設備を有する、小中併設の私立学校である。1997年に設立し、1998年4月からスリアラム社と賃貸借契約している現在地に移動した。児童生徒数は小中合わせて70名前後、教員は12名、事務職員は3名、外国人講師3名である。小学3年生以上は英会話の授業が週2時間入っており、英検取得している児童生徒もかなり多い。

3 体育授業

(1) 用具や施設について

海外ということもあり、日本と同じような用具や施設はなく、現地のものや簡易的なもので行う必要がある。また、高価なものは古くなっても新しいものを購入することが困難なため、用具を工夫して使ったりした。例えば、マットが古く汚れていたが、新しいものは購入できないため、ニトリでベッドカバーを買い、マットにかぶせて授業を行うなどした。「ネットボール」を実施しようと思ったのも、安価で用具が揃えられるという理由もあった。

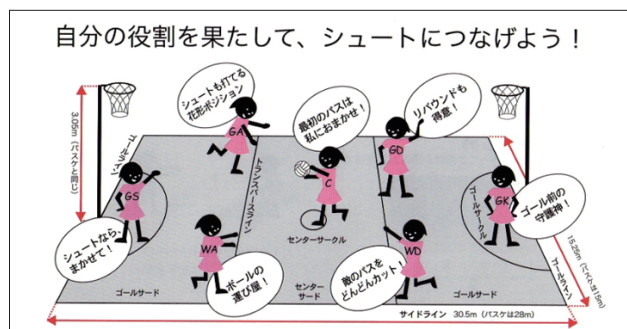
(2) 児童生徒の実態について

児童生徒は全体的に落ち着いており、学習に真剣に取り組んだり、自分達で集会を企画したりなど自主性がある。しかし、運動経験が少なく、体力テストの結果では全国平均に比べ、持久力が低いという結果が出た。登下校がバスであることに加え、日本のように部活動やクラブチームが盛んではない。また、暑さのため、日中に外で運動することはなかなか難しい。こういった現状を踏まえ、ジョホール日本人学校では積極的に運動のイベントを開催し、体力の向上や運動への興味関心を高める活動をしている。

(3) 授業実践

I. ネットボールとは？

1890年代、女性向けバスケットボールとしてイギリスで誕生した。基本的にはバスケットボールのような競技だが、いくつかルールが制限されている。コートは大きく3つに区切られて、ポジションによって決められた範囲しか動いてはいけない。また、バスケットのようにドリブルすることは禁止されており、ボールはパスのみで前に運び、ゴールを目指す。選手はポジションを示すゼッケンを付けてプレイする。選手同士の激しい接触がなかったり（禁止されている）、体力や体格に応じてポジションを選んだりできるので、老若男女を問わず生涯スポーツとして楽しむことができる。現在ではイギリス連邦諸国を中心に70を超える国と地域でプレイされており、競技人口は2,000万人を超えている。日本では1990年に、生涯体育が専門の神山雄一郎群馬県立女子大学教授が研究先のオーストラリアから持ち帰り紹介・普及を始めた。1999年から日本選手権が開催され、徐々に競技人口を増やしている。現在は、東京都および群馬県を中心に普及が促進されており、全日本チームも結成され、2回のアジア大会出場を果たした。



主な反則

オフサイド：ボールを持つ持たないに関わらず、規定範囲から出る行為。

オブストラクション：ボールをもつ選手の足元90センチ以内に近づき守備をすること、腕を突き出し攻撃を防ぐ行為。（ボールを押さえ、相手を動かさない行為なども含まれる。）

コンタクト：故意的または偶発的に関わらず、相手選手の動きを抑える接触をした場合。

ヘルドボール：パスまたはシュートするまでにボールを3秒以上保持。

ステッピング：ボールを持って3歩以上歩く。

ショートパス：第三者が入れない距離での2者間同士のパス。

リプレイオブボール：ドリブルや自分で投げたボールを自分で捕るなど続けてボールに触れる。

オーバー・ア・サード：どの選手にも触れることなく、コートの1/3以上を超えてボールを投げける。

II. 学校体育で教材化するためには

実際の授業では、公式のルールだとうまく試合が進行しないことが考えられる。特にヘルドボールという反則はボールを3秒保持した時点で取られてしまう反則である。これをそのままのルールで行うと、パスの出どころを見つけられなかったり、雑なパスをしてしまったりする恐れがあるので、単元の初期段階では3

秒を10秒にするなどルールの変更が必要である。また、競技人数に関しては、7人対7人だと密集してしまったり、衝突して怪我につながったりすることが推測される。行動範囲が限られているとはいえ、ボールに群がってしまい、競技のダイナミズムが失われる可能性がある。試合人数は5人対5人または6人対6人くらいがちょうどよいと思われる。(実際にやってみると5人対5人がちょうどよく感じた) また、単元の序盤は競技の特性も理解しきれていない可能性があるため、コートを狭くして4人対4人から始めるのがよいと考える。その際、外すポジションはWD、WA、Cあたりがよいと考える。

用具に関しては専用のゴール、ボール、ビブス(ゼッケン)が必要となる。店舗での販売はほとんどないが、インターネットで購入することができる。日本ではもしかしたら入手が困難かもしれないので、対応策としては、ゴールは既存のバスケットボールゴール、ボールはバレーボール、ビブスは数字のものを代用することで、競技を行うことは可能である。

Ⅲ. 授業から見たもの

ネットボールを題材化して授業を行った結果、大きく分けて2つの成果が見られた。1つ目は生徒の主体性が引き出されたことである。この競技の特性であるポジションごとの行動範囲の制限が個の能力よりもチームの連携をより必要とするものとなっている。つまり、チーム全員がボールに関わり、パスをつなぐことが必須の競技なのである。この特性だけでも十分学校教育で扱う価値はあると感じた。また、ポジションごとの役割においてもシュートを打てるポジションだからといって運動能力の高い人をあてればよいというものでもない。むしろ行動範囲の広い中盤の(GD、GA、C)のポジションにチームの中でより運動能力の高い人をあて、中盤を制することが重要となる。そしてGSというポイントゲッターになるところにチームの中でやや運動能力の低い人や身長の高い人をあて、そこにボールを供給し、ゴールを狙うという作戦が有効である。つまり、他の競技ではあまり活躍できないような生徒が重要な鍵を握り、チームの中でも期待され、鍛えられるという構造になっているのである。これにより、全体的な主体性が生まれることが期待される。

2つ目の成果は競技自体が未開発なため、創造性が育まれることである。この競技は、生徒はもちろん、授業者にとっても未開発な部分が多く、戦略、練習方法などに関して発展途上である。しかし、このことが逆に生徒の創造性を育み、様々なアイデアを生み出すことにつながった。授業においても、戦略や練習内容を生徒自身に考えさせてみた。すると、授業者が考えもしないものが出てくるが多かった。前述したGSのポジションにチームで運動の苦手な人をあてるという発想は生徒から出てきたものである。このように競技が発展途上であることを逆手に取り、生徒の創造性を育むことができたのである。しかし、これは偶然の産物であり、本来は授業者が様々な情報や知識を携え、授業をコントロールしていくことが大事である。

Ⅳ. 深化に向けて

実践して見えてきたこと

①教材として十分活用できること

ネットボールの特性上、チームプレイが重要であるため、ボールに触れない、いわゆる「お客さん」になってしまう生徒が存在しないことが学校体育にとっても効果的である1つと言える。バスケットボールのように上手な生徒が1人でドリブルし、シュートを決めるといったプレイがネットボールにおいてはルール上不可能なため、いかにチームで協力できるか、または運動が苦手な生徒をどのポジションに置くかが重要になる。まさに協働的な取り組みを必要とする競技と言える。

②7人制よりも5人制

ルールの工夫として本来の7人制よりもWDとWAを抜いた5人制の方がシンプルでやりやすく、一人ひ

とりがボールに触れる機会が多くなる。また、コートの広さも調整しやすくなる。本来のルールの方がより戦略的に試合を進められるという考えもあるが、中学生または小学校高学年の発達段階においては5人で行っても十分戦略を練ることが可能である。むしろ、5人の方が、作戦を共通認識しやすかったり、得意なポジションを見つけやすかったりして、利点が多いと考えられる。

③小学校中学年における活用の可能性

ネットボールの特性や戦術について知ることができたため、小学校3、4年生においても、試合を進めるために必要な知識や技能、それらを生かし、練習や試合を進めるための思考の育て方を授業者が事前にイメージしておくことで、授業を展開することができる考えた。

V. 成果と課題

小学部3、4年生にとってはルールが複雑であることと、ゴールにシュートを入れるのが困難なことが課題となった。これらはある程度想定していたことであったため、用意していた試合の映像を使用し、視覚的に理解を深め、改善することができた。また、シュートに関しては反復して練習し、技能を高めることもできたが、1度入らなくても繰り返し打てるようなポジショニングをすることでゴールに結びつくことに児童自ら気づいたことで課題を解決することができた。これらの気づきは導入初年度の授業者としての経験から児童にファシリテートすることにより、導くことができたと思われる。さらにチームでポジションを決める際にどのポジションにどのような特性があるか、また作戦を決める際にどんな攻撃の仕方があるかなどについても前年度の授業を生かし、選択肢を提示することができた。これらの手立てにより、小学部3、4年生においてもこの競技を取り扱うことができることが証明された。ただし、学習指導要領には記載されていない種目のため、ゴール型の球技の補助教材としての扱いにはなる。

小学部高学年と中学部の授業では競技力や戦術思考力を高めることを目指した。競技力を高めるために、まずは基本のパス、キャッチ、シュートの技能に時間をかけて高めた。特にシュートフォームに関しては全員で研究し、より確率の高いシュートフォームを見つけることができた。これにより、シュートチャンスでは高確率でゴールが生まれるようになった。また、戦術面においては攻撃の適切なスピードや中盤でどの程度人数をかけてボールを回すかなどを考え、より多くシュートチャンスを演出することを目指した。この競技の特徴でもある、ポジションによって動ける範囲が制限されていることにより、速攻があまり有効ではないことも気づくことができた。ディフェンス面ではボール保持者ではなく、ボールを持っていない人にディフェンスをつくことが有効な守り方であることに気づくことができた。これらは前年度の経験を活かし、この競技をより有効に進めるために見つけた新たな視点と言える。また、これらの視点に到達する上で、有効だったのが、前年度の自分たちの試合映像を参考に授業展開を行ったことだと考える。

VI. まとめ

ネットボールはチーム全員で役割を果たしながらパスをつなぎ、ゴールへとボールを運ぶ競技である。誰がどの役割に適しているか、ボールをどのように回すか、スペースをどのように生かすかなど考える視点も多いのが特徴である。競技の特性上チーム全員がボールに関わることで、作戦に対しても全員が主体的に関わりやすい。さらに、ディフェンスの制限が強く相手のプレッシャーも少ないので、安全面に配慮されているだけでなく、運動の苦手な生徒にとっても親しみやすい競技となっている。また、この競技はほとんどの生徒が経験したことがないため、先入観をもたずに、自由な発想で戦略や練習内容を考えることができる。

3年間このネットボールという種目を研究して感じることは、日本の学校体育においても十分取り入れる価値があるということである。しかし、知名度が低いことや、用具の入手が難しいことなど実施に至るまでに

は様々な障壁がある。今後、日本で実際に授業を行うだけでなく、地域の研究授業で提案するなどして、まずは知名度を上げていきたいと考えている。